

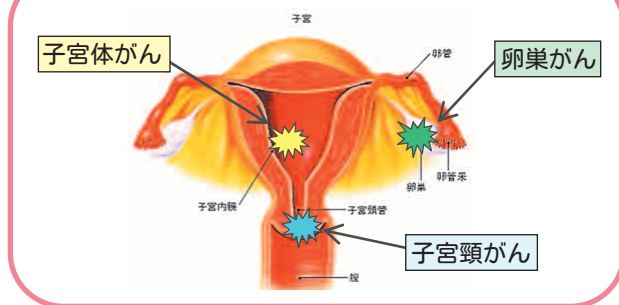
さぶりめんと

婦人科がん ～産婦人科にいこう～

産婦人科 伊藤 公彦

産婦人科で扱う婦人科がんの主なものに、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんの3つがあります。国立がんセンターの報告では年間の罹患者数は、いずれのがんも8,000～9,000人ですが、死亡者数は子宮頸がんが2,700人、子宮体がんが1,900人、卵巣がんが4,700人と違いがみられます。子宮体がんの多くが早期で発見されるのに対し、卵巣がんの半数以上が進行した状態で発見されるためです。

子宮頸がん・体がん・卵巣がんの場所



子宮頸がん 発症する年齢のピークは20代～40代と、若い人で急増しています。子宮頸がんの原因のほとんどは、ヒトパピローマウイルス (HPV) であることが分かっています。このウイルスは皮膚の表面のどこにでもいるのですが、性的接触で子宮頸部に細かな傷が付くことにより簡単に感染します(お風呂やプールや温泉では感染しません)。一旦感染しても9割以上の方は自然に排除されますが、排除されずに持続感染した人から子宮頸がんは発症し、その割合はHPV持続感染者の1,000人に1～3人とされています。すなわち、**子宮頸がんを予防するにはできるだけ性交デビュー前の学童にHPVワクチンを接種すること**です。これにより頸がんの60～70%は予防できますが、ワクチン接種だけではすべての子宮頸がんは予防できません。**子宮頸がんの早期発見にはがん検診が有効である**ことが証明されていますので、10代～30代の若い女性はワクチン接種を、20代以上の女性は子宮がん検診を必ず受けてください。

子宮体がん 肥満、糖尿病、高血圧などの生活習慣病がリスク因子とされており、年齢のピークは50代～60代で、初期の症状として通常、不正性器出血があります。がん検診は有効ではありませんので、**特に更年期以降の不正性器出血を認めたら、そのうち止まるだろうと放っておかず、すぐに産婦人科を受診してください。**

卵巣がん 初期の自覚症状がないまま、腹痛や腹部膨満感がでてきて受診したら3、4期と進行していたというケースがほとんどです。年齢のピークは50代から横ばいで80代からまた上昇します。がん検診も有効な方法が見つかりません。最近、**お腹が出てきた気がする、なんかおかしいと感じたら、産婦人科を受診する**のもよいと思います。

	子宮頸がん	子宮体がん	卵巣がん
初期の自覚症状	なし	不正性器出血	なし
年齢のピーク	20代～40代	50代～60代	50代～80代
ポイント	HPVワクチン接種と子宮がん検診が重要	肥満、糖尿病、高血圧の生活習慣病がリスク因子	腹痛、腹部膨満感があれば迷わず受診を

いずれのがんも、早期に発見されれば手術で治ります。ある程度進行していた場合は、患者さんの状態に応じて、手術、放射線、抗がん剤を適切に組み合わせた治療を行います。恥ずかしい、面倒くさいと思わずに、産婦人科を受診してくださいね。



理念 基本方針

●● 良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために ●●

- ・私たちは、働く人々の健康確保のための医療活動、即ち「勤労者医療」の中核的役割を担ってこれを推進します。
- ・私たちは、急性期医療機関として良質で安全・高度な医療の提供を行うとともに、地域の諸機関と連携して地域医療の充実を図り「地域に生き、社会に応える病院」としての発展を目指します。
- ・私たちは、患者様の権利を尊重し、医療の質の向上ならびに患者サービスの充実に励み、「信頼され、親しまれる病院」作りを心がけます。
- ・私たちは、「開かれた皆様の病院」として、ボランティアや有志の方々の病院運営への参加・協力を歓迎します。
- ・私たちは、病院使命の効果的な実現のために「働き甲斐のある職場」作りを行い、運営の効率化と経営の合理化を推進します。

イメージキャラクター
がんろっこ